「信濃国聖事」のなりたちとその語り手

木村紀子*

要旨

古本説話・宇治拾遺にほぼ同文で収められている「信濃国聖事」は、その語り口に、それらの作品成立期以前の大変古い要素が指摘でき、物語の主要部分は、主人公命蓮聖が活躍した延喜のころからさほど下らない時期に、東大寺界隈という古代の物語生成の一聖域において語り始められたと見られるものである。現伝のその物語は、冒頭部・飛倉の段・延喜加持の段・尼君の段という起承転結の四段構成で成り立っているが、用語や語り口を詳しく検討すると、冒頭部・飛倉の段・尼君の段でなりたっていた老女からの聞書き風の物語に、これもまた起承転結構成でつくり物語された延喜加持の段を挿入して成立させたものと見てとれる。宇治拾遺中の過半を占める平安中ごろ以前の多くの物語とも用語や語り口を共有するこの物語は、総じて宇治大納言源隆国の語り口であることが検証できるものである。

一

院政期大治のあたりに成立したかと見られている古本説話集には、下巻に集められた霊験譚の中に、

信濃国聖事65

信濃国沈摩陽観音為人令沐給事69

という信濃国にかかわりをもつ二つの物語がある。「信濃国聖事」は、実は下巻の中で唯一目録を欠くもので、右の題目は、同文的同話をもつ宇治拾遺の古写本の題目を転用したものである。ただし、古本説話の現存写本の本文の中では、前後の物語と同筆で異和なく書写されており、後半部分に一丁分の欠落があること以外には、あとから挿入した等の痕跡は認められない。ちなみに、古本説話下巻の二十四話のうち、右の二話も含めた十一話は、宇治拾遺におおよそ同文で重なるものがあり、うち九話は今昔物語集とも重なるが、それぞれの題目のつけ方は、とくに古本と宇治とで、次のようによく似ている。

古　依清水利生落入谷底（少児令生）事49
宇　検非違使忠明事95
今　検非違使忠明於清水値敵存命語巻19－第40

平成11年9月30日受理
＊国文学研究室

古　極楽寺僧施仁王経験事51
宇　（同　右）191
今　極楽寺僧誦仁王経施霊験語巻14－第35
古　留志長者事56
宇　（同　右）86
今　盧至長者語巻3－第22
古　清水寺二千度詣者打入双六事57
宇　清水寺二千度詣者打入双六事87
今　清水寺二千度詣男打入双六語巻16－37
古　長谷寺参詣男以蚊替大柑子事58
宇　長谷寺参籠男預利生事97
今　参長谷男依観音助得富語巻16－第28
古　清水寺御帳給女事59
宇　清水寺御帳給ル女事131
今　貧女仕清水観音給御帳語巻16－第30
古　伊良縁野世恒給毘沙門下文鬼神田与給物事61
宇　伊良縁野世恒給毘沙門御下文事192
今　生江世経仕吉祥天女得富貴語巻17－第47
古　観音経変化地身（ママ）輔鷹生事64
宇　観音経化蛇輔人給事88
古　（目録欠）65
宇　信濃国聖事102
今　修行僧明練始建信貴山語巻11－第36
古　自賀茂社給御幣滅程用途僧事66
宇　自賀茂社御幣紙米等給事89
古　信濃国沈摩陽観音為人令沐給事69
宇　信濃国筑広（ママ）湯観音沐浴事89
今　信濃国王藤観音出家語巻19－第11

・今昔で、一段落したものは、同文的とはみなせないもの。
・物語番号は、岩波新古典大系によった。

こうした題目のつけ方の近似性や、傍点で示した特殊用字の同一性は、両者ともに一本にゆきつくような先行本のあり方を踏襲したとしか考えられないものだが、とりあえずそのことは措いて、冒頭に挙げた二話のことにかえりたい。その前者は、いうまでもなく、信貴山を開いた高名な「まうれん聖」の物語、後者は、狩でけがして湯治にやって来た筑摩の湯で、何の因果か待ちうけていた人々から観音の変化と拝みに拝まれ、「わが身はさば観音にこそありけれ」と思うに至り、たち所に出家してしまった上野国の「わとうぬし」なる聖の物語である。いずれも信濃国で、いわば私度的に法師になった二人であったが、さてその後に志した所は、少し異なっていた。まうれん聖は、

○さる田舎にて法師になりにければ、まだ受戒もせで、いかにで京にのぼりて東大寺といふ所にて受戒せんと思て、とかくしてのぼりて受戒してけり。

と、東大寺を目指して「京にのぼっ」たのであったが、他方、わとう聖の方は、

○法師に成て後、横川にのぼりて、かてう僧都の弟子になりて横川にすみけり。

と、比叡山を目指して上京した。

まうれん（命運）聖は、「信貴山資財宝物帳」（九三七）によれば、寛平から延喜の頃の人である。他方わとう聖は、師とした横川のかてう僧都が、今昔物語集では「覚朝」と記され、「覚超」のことだろうとされる人物のころの人だったと見なされる。兜率の僧都とも呼ばれた覚超は、命運からはほぼ百年後の御堂関白道長の頃の人である。「覚超」が平安盛時の公家方の発音で「カウテウ」と柔らかく音便化し、音便無表記で「カテウ」と記されることはありうることでもある（信貴シンギ→シギと同様）。その百年ほどの間に、遠い国々での「みやこ」第一の大寺の聞こえは、東大寺から叡山へと緩やかに移ったのだろう。

とまれ、命蓮を主人公とする「信濃国聖事」は、山深い田舎の少年僧が、笈を背負って志す「京の大寺」が、まずは東大寺だった頃の古りし昔の物語であった。

「信濃国聖事」は、周知のように国宝「信貴山縁起絵巻」の詞書とほぼ共通する。しかし、宇治拾遺の題目は、なぜか「信貴山の聖」とはされていなかった。宇治拾遺中の聖の物語の題目のつけ方（さきに見たように、その題目の大半は、古本説話・宇治拾遺という作品成立以前にあった可能性をもつ）の中で、聖の肩書のつけ方は、

○大和国に龍門といふ所に聖ありけり。住ける所を名にて龍門の聖とぞいひける。（龍門聖鹿欲替事7）

○清滝川のおくに柴の庵つくりておこなふ僧有けり。（清滝川聖事173）

と、修行の場を冠せて呼んでいる。何よりも、信貴開山の祖として、公家方でも「志貴山寺住沙弥命蓮」（扶桑略記裏書）「信貴山命蓮聖人」（山槐記）などといわれるのだから、「信貴山の（命蓮）聖の事」と題した方が、通りもよかったのではないだろうか。しかし、そうではなかったのは、この物語を文字語りとして成立させ題目をつけた人が、とくに「信貴山の聖」として語ったわけでもなかったということだろう。物語中「信貴」の名が出るのは（以下、引用文の基本は全文をもつ宇治拾遺〈御所本〉による。理由は後述。宇、古、絵〈絵巻詞書〉とつける場合は、それぞれの文）、

○ある人の申やう、河内の信貴と申所に此年来行て里へ出る事もせぬ聖候

也。

という、延喜加持の段に出るものと、

○さて、信貴とてえもいはず験ある所にて、今に人々あけくれまいる。

という結びの部分の二か所だけで、しかもその言い様は、この物語圏の人々にとって、「信貴」という地名は「清滝川」ほどにもしられていないらしい言い様である。そして場面はおおむね、

○坤のかたにあたりて山かすかにみゆ。そこにおこなひてすまむと思て行て、山の中にえもいはず行ひて過す程に、

○此山のふもとにいみじき下す徳人ありけり。

○河内国に此聖のおこなふ山の中に飛行て、

というように、ただの修行の場としての無名の山中として語られる。それは、

○（姉の尼）東大寺・山階寺のわたりを、「まうれんこゐんといふ人やある」と尋ぬれど、

と、突然、当然のように名の出る「山階寺」と比べても、やはり周知の地名というわけではなかったのだろう。

他方、「信濃国」の聖という呼称は、おそらくは聞手（みやこ人）に独特のイメージを喚起するものだったと思われる。それは、自らの観音性に目覚めるや、たちまちに出家した「わとう聖」の直情徑行はもとより、

○あづまの人の、狩といふことをのみやくとして、……いみじう身の力つよく、心たけう、むくつけきあら武者の……　（吾嬬人止生贄事119）

といったイメージにも通う、果敢な行動力と一途な志においてみやこ人を超え、女の尼君にして、はるばる弟を尋ねて一人旅もいとわず、かつ厚い思いやりの人々、というあたりのイメージだろうか。

ところで、いにしえのイモ・セ（同母姉弟または同母兄妹）の情愛[1]をさながら承け継ぐ、弟想いの姉君の手みやげは、

○「さていかにさむくておはしつらん、これをきせたてまつらんとてもたりつる物也」とて、ひきいでたるをみればふくたいといふ物をなべてにも似ず、ふときいとしてあつ〳〵とこまかにつよげにしたるをもてきたり。

という「ふくたいといふ物」だった。この「ふくたい」は、当時の古辞書等にもそのままでは見出せず注釈書類でもどんな物か明らかにされていないが、漢字を宛てるなら「複衲」で、その「複」とは、新撰字鏡巻四衣部第三十九に「複。方六反入。絮衣也、厚也、除也、被也。和太己呂毛」とあり、また、和名抄衣服具の「襲」の説明の中にも「衣之単複相具謂之」とあるように、「単」に相対する「あわせ・わたいれ」（大漢和辞典）の意と見られる。「たい」については、すでに指摘があるように和名抄僧房具に「衲俗云能不。二云太比。」とあるもので

ある。古本説話はこの部分落丁部にあたるが、後文の、

○さておほくの年比此ふくたいをのみきて行ひければ、はてはやれ〳〵ときなしてありけり。鉢にのりてきたりし蔵をば飛くらとぞいひける。その蔵にぞふくたいのやれなどはおさめてまだあんなり。

とある所では、同様に「ふくたい」とある。ところが、絵巻詞書では、ただ「たい」とのみ出て「ふく」をつけない。おそらく、真綿を入れ刺子を施したキルティング風の僧の暖衣「複衲」は、

○貧乏しき僧・尼に絁・綿・布を施りたまふ。（日本書紀　天武八年三月）

という奈良朝から平安前期の漢語一辺倒だった頃の呼称で、平安中ごろ以降は、「ふくたいという物」という様になじみが薄くなっていたのではないだろうか。

これに関連して思い合わされるのは、宇治拾遺中の「上緒主得金事161」である。今昔にも重出するこの物語は、その終りの方に大納言源の貞（嵯峨天皇子）とのかかわりが語られ、貞観あたりのたいそう古い事を語るものであるが、上緒の主なる主人公が、中が金色の石を手に入れる代りに、持主だった女に、

○わたぎぬをぬぎて、たゞにとらんが罪えがましければ、此女にとらせつ。

というところがある。すると女は、

○「ふようの石のかはりに、いみじきたからの御ぞのわたのいみじき給はらん物とは、あなおそろし」といひて、さほのあるにかけておがむ。

と、「綿衣」をよほど貴重なものを拝領したという風に受取っている。おそらく「ふくたいといふ物」も、その切れ端に縁を結ぼうというような人々にとっては、それなりの「宝の御衣」の響きがあったと思われる。ところが「上緒主得金事」のこの部分に相当する今昔（巻26－第13）では、「着タル衣ヲ脱テ嫗ニ取ラスレバ、」「嫗……不用ノ石ノ替ニ此許極キ財ノ御衣ヲ給ハラムトハ不思ツ。穴怖シ」となっていて、「綿衣（わたぎぬ）」が単なる「衣」になっている。今昔本朝世俗部は、総じて、今昔なりの「今」の感覚や詞で語ろうとする傾向が顕著であり、そのことは、伊勢物語に重なる話などで対照するとよくわかるが、おそらくここも綿衣がすたれ重ね着が一般になっていた院政期初め頃の京の感覚で語ったものだろう。そして、今昔と成立時期が近いとみられる絵巻の詞書が、「ふくたい」をただ「たい」としていることとの偶合はたいそう興味深い。

なお、宇治拾遺中の平安前期のことを語る物語で、今昔に同文脈で重出するものがある場合、今昔は用いない古めかしい用語を、宇治拾遺では、古語の稀少例として伝え遺して語っているものが、次のように折々見出せる。

○陽勝仙人と申仙人、空を飛てこの坊のうへを過けるが……おりて高欄のほこ木〈高欄の上位の横木＝鳥居桁〉の上に居給ぬ。

（千手院僧正仙人　逢事105）

○長高き僧の鬼のごとくなるが、信濃布〈科の繊維による粗布〉を衣にき、杉の足駄をはきて、（相応和尚上都卒天事193）

○桙・榊・鈴・鏡をふりあはせて〈タマ（霊）フリのフリアハセ〉さきをひののしりてもてまいるさまいといみじ。（吾嬬人止生贄事119）

「信濃国聖事」は、それら「昔」の物語と、宇治拾遺の中で一群も成しながら、主人公命蓮の生きた延喜の頃からさほど下らない古きよき時代の語り口を、そこはかとなく伝えて語られているものであった。

二

「信濃国聖事」の第一場は、「東大寺の仏の御まへ」である。信貴山は、そこからちょうど「坤のかたにあたりて山かすかにみゆ」と遠望される実在性をもって語られる。これは、物語の展開の上での重要句であり、後にまた、信濃からはるばる東大寺を目当てに尋ねて来た姉の尼君が、

○これよりひつじさるのかたに山あり。其山に雲たなびきたる所を行て尋よ。

と、夢に大仏の仰せをうけて、

○ひつじさるのかたを見やりたれば、山かすかに見ゆるに、紫の雲たなびきたり。

と、三たび繰り返して語られて、聞手に反復効果によるその後の展開を暗示し、いかにも口語りに発したらしい物語の名残りを伝えるものである。語り手もまた、信貴山が東大寺から坤の方にあたるという位置関係の実感をもって語っていると見られる。ところが、肝腎の信貴山のこととなると、たとえば、どんな風に人跡まれなけわしい山だとか、どこに庵を結び堂を建ててどんな修行をしたかといった具体性は皆無で、ただ、

○行て山の中にえもいはず行ひて過す程に、すゞろにちいさやかなる厨子仏をおこなひいだしたり。

というのみであり、尼君が尋ねてゆく場合にも、

○そなたをさして行たれば、まことに堂などあり。

と、至って簡略にすまされる。鹿の遊ぶ美しい生駒信貴山系の景が描かれる絵巻の詞書でもある「信濃国聖事」は、実は、信貴山がどんな所かは全く語られていないものだった。このことは、今昔巻11－第36の「修行僧明練始建信貴山語」と見比べると、その違いが明白である。「明練」は「常陸国人」とする今昔の方では、東大寺の名も大仏とのかかわりなども一切記されることはなく、ただ諸国修行の間に大和国に至った修行僧が、

○東ノ高キ山ノ峯ニ登テ見レバ、西ノ山ノ東面ニ副テ一小山有り。其山ノ

上ニ五色ノ奇異ナル雲覆ヘリ。

と、五色の雲の覆う山を目にとめたとする。しかしその後は、

○其ノ雲ヲ注ニテ尋ネ行ク。山ノ麓ニ至ヌ。山ニ登ラムト為ルニ、人跡无シト云ヘドモ、草ヲ分チ木ヲ取テ登ルニ、山ノ上ニ猶此ノ雲有リ。其所ヲ指テ登リ立チ見ルニ、東西南北ハ遙ニ谷ニ下タリ。峯一ツ有リ。……木ノ葉多積テ地モ不見、只指出タル物ハ大ニ喬立テル石共也。

○忽ニ柴ヲ折テ庵ヲ造テ、其レニ居ヌ。亦、忽ニ人ヲ催テ其檀ノ上ニ堂ヲ造リ覆ヘリ。大和・河内ノ両国ノ辺ノ人、自然ラ此事ヲ聞キ継テ、各力ヲ加ヘテ此堂ヲ造ルニ、輙ク成ヌ。

などと、信貴山の山容や開山のさまがリアルに語られている。この具体性は、「資財宝物帳」に記された近在からの多くの「施入」や「造堂」の記述にもより近いようにも思える。今昔は、現実に信貴山のような山で修行もしたことがあるような修行僧系の語り口がもとになった、その題目どおりの「始建信貴山」を語るものである。ならば、古本・宇治が伝えるような語りは、そもそもどのような語り手に発するものだろうか。

「信濃国聖事」は、絵巻が冒頭部を省いた三巻仕立てで伝わるように、冒頭部分に続き、飛倉の段・延喜加持の段・尼君の段の、明らかな四段仕立てで成り立っている。それは、いわば起承転結構成でもあり、宇治拾遺の中の源隆国没年以前に成立していたと見られる古い物語にとりわけ特徴的な語り方でもある。[2] それらは、序破急三段構成の院政期末成立かと見られる物語群と、宇治拾遺の中で明らかな特徴として二分もされるもので、「信濃国聖事」の位置づけを考える手がかりとなるものでもある。

ところで、起承転結構成の結にあたる尼君の段は、東大寺の仏の前から坤の方を望む反復の語りで、当然、冒頭部を承けて語られているものである。また、結びは、

○さて、おほくの年比、此ふくたいをのみきて行ひければ、はてはやれ〳〵ときなしてありけり。鉢になりてきたりし蔵をば飛くらとぞいひける。その蔵にぞふくたいのやれなどはおさめてまだあんなり。其やれのはしをつゆ計などをのづから縁にふれてえたる人はまもりにしけり。その蔵も朽やぶれでいまだあんなり。その木のはしを露斗えたる人はまもりにし、毘沙門を作たてまつりて持たる人はかならず徳つかぬはなかりけり。さればきく人縁を尋て其倉の木のはしをば買とりける。

と、尼君の持参した「ふくたい」のことと共に飛倉のことを承けた結びとなっており、冒頭部および飛倉の段と、尼君の段（および結び）とは、密接なかかわりをもって語られている。ところが「転」にあたる延喜加持の段は、

○ある人の申やう「河内の信貴と申所に此年来行て里へ出る事もせぬ聖候也。それこそいみじくたうとくしるしありて鉢を飛しさてゐながらよろ

づありがたき事をし候なれ。……」

と、いちおう「鉢飛し」には触れているが、それは、今昔にも「鉢ヲ飛シテ食ヲ継ギ」とあるのと同様、当時の験力を得た聖に対する一般的な言われ方にすぎず、それ以外、とくに他の段とかかわって語られるところはない。「信貴」という地名も、帝近侍の「ある人」の言としてここではじめて出るものであった。つまり、四段中、延喜加持の段のみはやや独立的で、かりにそれを省いた形で展開していた物語とすると、先に挙げた結びの部分の利益語りも、承け方がより密接で腑に落ちるものとなる。そして、

○さて、信貴とてえもいはず験ある所にて今に人々あけくれまいる。

という結文も、さいごにはじめて具体名が出る形となって、縁起風語り口も生きるものだろう。

「信濃国聖事」は、口語りから文字語りとされた過程で、いったん延喜加持の段のない形で書きとられていた利益語りの物語に、あとから延喜加持の段を挿し入れて、起承転結構成につくり直したものではないだろうか。このことは、語りの言葉づかいの細部においても、次のような差異をもつことで確認できる。

尼君の段では、さきに引用した部分にも見られるとおり、接続詞のサテ、係助詞のゾ、副助詞のナド、助動詞のケリが、とくに頻用されて目につくが、それらは冒頭部や飛倉の段にも同様に認められるものである。ところが延喜加持の段では、ケリがわずかに二度使われるのみで、文末もほとんどが動詞原形止め、会話で坦々とつないでゆく語り方が主で、接続詞などは用いられない。今そのことを、具体的に頻度数で示すと次のとおりである。

	全体数	延喜加持の段の数
サテ（接続詞）	9〈8〉	1〈0〉
ゾ（係助詞）	6	0
ナド（副助詞）	6	1
ケリ（助動詞）	30	2

〈　〉の数は、会話中を省いた数。

延喜加持の段は、禁裏の奥深く、帝の寝所にまで近侍した語りで、たとえば大鏡の語り手が、

○いかでかくよろづのこと、御簾のうちまで聞らんとおそろしく……

（巻六）

とこだわった、下々では容易に語り得ないおそれ多い領域である。それを、何の憚りもなく帝に近侍し、勅使の蔵人よりも高い視点の言葉づかいで坦々と語るのは、それなりの身分の人の語り口ということではないだろうか。つまり、飛倉・尼君の段と延喜加持の段とは明らかに別口に発しており、そのような口々の語りを融合させて、「信濃国聖事」は成立していると見られるものである。

延喜加持の段が挿入される前の利益物語は、そもそもどのような場で語り出されたものであろうか。資財宝物帳の記述や今昔の語りが東大寺には全く触れないように、東大寺と信貴山は寺としてとくに関係があるわけではない。にもかかわらず、東大寺の仏の御前が重要な場面となっているのは、物語の直接の内容とは別の意味があるのではないだろうか。

主人公命蓮の生きた時代とほぼ同時代、宇多・醍醐・朱雀の約五十年間の宮廷社会が回想的に語られる大和物語は、後半部分にそれ以前の時代からの昔物語を収めるが、一四七段から一五八段（岩波大系本による）の大和国の古物語の中に、津の国（147・148）、陸奥（155）、信濃（156）、下野（157）といった他国の物語が含まれている。それらをもなぜ大和物語とするのかは、付載説話の中に、

○さて、かのはつせにまうでて、三条よりかへりけるに、あすかもといふ所に、あひしれる法師も俗もあまたいできて、「けふ日はしたになりぬ。ならざかのあなたは、人のやどり給ふべき家もさぶらはず、こゝにとまらせ給へ」といひて、かどならべに家ふたつをひとつにつくりあはせたる、をかしげなるにぞとゞめける。あるじなど人々しければ、物などくひてさはがしきほどしづまり、ほどなく夕ぐれにはなりてけり。

（平中物語三六段　ほぼ同文）

といった、初瀬詣での宿場としての飛鳥本（元興寺近く）の雰囲気を伝える語りのあることが思い合わされる。

平安前期、東大寺界隈は、古都であり、大仏殿・戒壇院があり、長谷参りの宿場でもあるといった、処々方々からそれぞれの想いを持った人々が往来・集散し、いわば言霊の八十の「ちまた」として様々のうわさ、物語などもゆきかう聖域であったと見られる。「大和物語」とは、「大和」を語ると共に、「大和」という特別の場で語られた物語として、津の国や陸奥や信濃・上野のことも、おのずとその中に流れ込んで語り継がれていたのだろう。[3]「東大寺の仏の御前」とは、要するにそのような意味をもった聖域の中心である。

ところで、まうれん聖は、信濃から来た人として問題はないだろうか。資財宝物帳の、

○右命蓮、以寛平年中、未弁菽麦幼稚之程、参登此山。但所有方丈円堂一宇、安置毘沙門一軀。爰愚私造閑室、限十二年山蟄勤修之間、更無人音、仏神有感。……

という、「承平七年六月十七日住侶沙弥」とあるいわゆる置文の傍点を付けた部分は、つまりは仏道修行のイロハも弁えない幼い時分にこの山に登ったというのだから、それは、今昔の「国々ノ霊験ノ所々ニ修行スル間ニ、大和ニ至」った常陸国の修行僧というよりも「信濃国聖事」の、ただ一途に東大寺を目ざし、そこからまた「のどやかに住ぬべき所」として坤の方の山を目ざしたとする山国信濃出の少年僧という方が、本当らしく聞こえる。後に、案じた姉君が「まうれん小院やいまする」と尋ねて来るというのも、いかにも「小院」と呼ぶ幼い

時分に別れた風情を伝えている。

また今昔は、もっぱら「多門天」の「石櫃」[4]の「希有ノ瑞相」を中心にすえて語るが、資財宝物帳の「安置毘沙門軀」というのみの記述は、むしろ、

○すゞろにちいさやかなる厨子仏をおこなひだしたり。毘沙門にてぞおはしましける。

というあたりの方がよく対応する。つまり、今昔の語り方は、信貴山の山容や房舎のことについては、現実味をもっているが、ミヤウレン自身については、開山の偉業をなしとげた伝説の聖という以上には、ほとんど知るところなく語った可能性もあるものである。

ところでまた、飛倉が現実にあったとはとても思えないが、信濃から「ふくたい」を持って姉が尋ねて来たということは如何だろうか。

物語の結末は、さきに引用したように、飛倉と複衲の利益を語って結ばれる。人々にとって、その語りのまことらしさは、破れ朽ちながらも「いまだあんなる」飛倉や複衲の切れ端を見ることで、ありありと信受される。そしておそらく仏舎利のように、実体の何倍もの切れ端が出廻っていたにしても、その利益が説かれる時は、この物語が語られ、この語りのインパクトで、また競ってその切れを求めるという、新興宗教的狂信の熱気が、命蓮没後さほどの年月を経ずしてあったことも、物語はおだやかに語り伝えている。しかし、「いまだあんなる」という伝聞の言い方の繰り返しは、明らかに「まだある」ことをじかに目にしてはいない、信貴山をいわば「かすかに」望みながらの語りとして成立していたことをいみじくも語り残している。多分この物語の語り手は、今昔の語り手のようには、信貴山に登ってみたことはなかったのである。

信貴山資財宝物帳には、「伊福部薬子等施入地参段／志紀定子施入地漆段／飛鳥戸糺子施入田壱段／尼妙恩施入地壱段並林地肆段」等と、とくに女の田畑の施入が目立っている。信貴山が急速に人々の信仰を得、飛倉の風聞を生むほどにたち所に堂宇を整え得たのは、命蓮の力にあわせて、あるいは姉の尼君との共住によって、近在の身よりをなくした女達が、財物の施入と共に入山して身を托すといったこともあったのだろう。[5]倉の木の端が徳のつく守りとされたのはともかく、複衲の破れの切れが何の利益になると説かれたかは、おそらくポックリ寺信仰のような、安らかな老いと死を迎えられる「まぼり」とされたのである。そのような利益を語るこの物語の原型が、当然実際にその利益に対し切実な祈りをもつ人々を中心に、語り継がれたものだったことは言をまたない。[6]

後に、今鏡は、その冒頭で語り手を、

○やよひの十日あまりのころ、同じ心なる友だちあまたいざなひて、長谷に詣で侍りしついでに、よきたよりに寺巡りせむとて、大和の方に旅ありき日ごろするに、……みづはさしたる女の杖にかかりたるが、めのわらはの花がたみにさわらび折り入れて、ひぢにかけたる一人ぐして、そ

の木の下にいたりぬ。

という老女とするが、平安中ごろ以降、そのような「昔物語」をする老女・老尼体の人々に、長谷詣でや大和の寺巡りの折などには出会うことも稀ではなかったことを踏まえて、設定されたものだったと思われる。

三

「信濃国聖事」の延喜加持の段を除いた原型を、いわば老女からの聞書き風の語り口で書きとった人と、延喜加持の段を落き入れた人とは、同一人物と見てよいだろうか。

その検討に入る前に、すでに多くの先学の所見もあることながら、現存三本の異同について若干の検討を加えておきたい。なお、周知のとおり、絵巻は冒頭部から飛倉の段のほとんどを欠き、その他延喜加持の段の中間等にも省略部分があり、一方古本は尼君の段で一丁分欠落があるので、三本の本文が共に備わるのは物語文全体の半分強にすぎない。それをもとに、まず全体的な三本の関係を大雑把にいうなら、古本と宇治（とくに御所本）[7]とはかなり近く、絵巻詞書は両者とは少し距離があるが、どちらかと言えば古本系統から出ていると見られるということである。

絵巻は、飛倉の段の終りの所で詞書にして十行分程度、剣の護法をつかわす所で六行分程度、その他にも若干、古本・宇治が共通にもつ部分を省略している。しかし、古本・宇治との距離が認められるのは、そのことよりも、延喜加持の段を中心とする次のような敬語の用語の違いである。

- さてはもしおこたらせおはしましたりとも（古・宇）
- さてはもしをこたらせたまひたりとも（絵）

- さらばいのりまいらせん、やめたまへらば（古）〈宇は省略〉
- もし、　いのりやめまいらせたらば（絵）

- 御心地さは〳〵となりて、いささか心くるしき御事もなく（古・宇）
- おほむ心ちさは〳〵とならせたまひていさゝかくるしきこともおはしまさで（絵）

- たうとくおぼしめして人をつかはして（古・宇）〈左、古本〉
- たうとくおぼえさせたまへば、人つかはす（絵）

絵巻詞書は、これらに見る限り明らかに別口で語り直されている。ただ、宇治と古本とで異なる「東大寺・山階寺」「僧都・僧正」の順番や、結びの部分などで、

- びさもんをつくりたてまつりてぢしたてまつるひとは（古・絵）
- 毘沙門を作たてまつりて持たる人は（宇）

- えもいはずげんじ給ところにて（古・絵）
- えもいはず験ある所にて（宇）

と、宇治と古本で異なる言葉遣いが、絵巻は古本の方に重なる場合がほとんどで、そこからすれば絵巻詞書は古本系統から派生したことが考えられるものだろう。

さて、宇治は古本にくらべ、とくに延喜加持の段を中心に一見省語的にみえるが、句ないし文レベルの相違は、

「此山のふもとにいみじき下す徳人ありけり。（宇）
「山ざとにげすに人とていみじきとくにむありけり。（古）

という所が目に立つ以外、特記すべき所はない。他は、宇治にあって古本にない部分が次の傍線部の二か所、

○すゞろにちいさやかなる厨子仏をおこなひいだしたり。毘沙門にてぞおはしましける。
○河内国に此聖のおこなふ山の中に飛行て、聖の坊のかたはらにどうとおちぬ。

逆に、古本にあって宇治にない部分が、尼君の段の冒頭部に二か所（用例後掲）あるが、この二か所は絵巻にはあるので、いちおう宇治の方が省略したかと見られるものである。「信濃国聖事」の三本の比較だけで見れば、絵巻とも近い古本がより原本的体裁を保ち、それに対し宇治は省文・省語気味だというのが、大略の見方となるだろうか。しかし一章で目録を挙げた古本説話下巻における宇治拾遺との重複物語全般について見れば、そう単純には結論づけられないあり様を孕んでいる。

宇治拾遺・古本説話下巻重出の十一話は、同文度は必ずしも各話一様均一というわけではない。傾向として注目されることは、「清水寺御帳給女事」を筆頭に和文的・民間物語的なものが概して同文度が高く、「留志長者事」「極楽寺僧施仁王経験事」のように、先行文字資料があったと見られるようなものが、かえって異文度が高いということである。

「極楽寺僧施仁王経験事」は堀河太政大臣基経にかかわる寛平ごろのこれもたいそう古い事を語るものであるが、護法童子が病鬼を追払うという点で、延喜加持の段に通うところもあるものである。今昔とも同文脈で重なるが、全般的に宇治と今昔が語り口や用語で近く、古本は和らげた用語で語ると見られることが、とくに次のような違いで確認できる。

1
古　（相当句なし）
宇　仁王経を他念なくよみたてまつる。
今　他ノ思ヒ无ク念ジ入リテ、仁王経ヲ読誦シテ祈リ奉ル。

2
古　「よびいれよ」とて、御とのごもりたるところへめしいる。
宇　「内へよび入よ」とて、臥給へる所へめし入らる。
今　「此ノ内ニ呼ビ入レヨ」トナ、臥シ給ヘル所ニ召シ入ル。

古　「なに物のかくはするぞ」と問ひつれば、

3
宇　「何ぞの童のかくはするぞ」ととひしかば、
今　「何ゾノ童ノ此ハ為ルゾ」ト童ニ問ニ、

4
古　つとめてより候て、仁王経よみたてまつるあひだ、
宇　仁王経を今朝より中門のわきにさぶらひて……
今　今朝ヨリ……仁王経ヲ誦スル間、

5
古　ひともじもこと事を思はずひとへにねんじよみたてまつる。
宇　他念なくよみ奉て祈申侍る。
今　一文一句他念无クシテ心ヲ至テ誦スル。

6
古　御いかにかかりたる御ぞを召して、
宇　棹にかかりたる御衣をめして、
今　御桿ニ係タル御衣ヲ召テ、

なお同様に同文話をもつ鎌倉期の真言伝（大日本仏教全書）は、やや錯誤が目につくが、右に相当する用語は、「1ツュ他念ナク／2フクセ給ヘル処／3打ハラヒツレハナン其童ノ／4朝ヨリ／5・6相当部なし」となっている。

1と5の宇治が用いる「他念なく」について、すこしつけ加えておきたい。古本ではむろん全体を通じてこの用語は出ないが、宇治には他に二例みられる。

○念仏は他念なく申て死ぬれば、　（薬師寺別当事55）
○此年来、他念なく経をたもち奉りて、　（猟師仏ヲ射事104）

この二例も今昔に重出する物語で、今昔にも同語として出るが、ただし今昔は、さきの1の例や、右の104の対応語が「他ノ念」とノが入っているので、ノの入らない場合も注釈書類は「他念（ホカノオモヒ）」と訓んでいる。宇治の四例はいずれも仏道修行にかかわって用いられるが、とくに仏教用語というわけではないようである。なお、日本国語大辞典には「小右記」の例が挙げてある。

また、6の宇治の「棹（さを）」の例は、本稿一章に挙げた「上緒主得金事」の用例と同じものである。しかし、語の性格上、「棹」も「衣架」も、平安期の他作品にはめったに出て来ず、宇津保祭の使に「御いか」の例があるくらいである。なお、催馬楽には「みぞかけ」と出る。

さて、古本説話集の現存写本は、ほとんどがかな（女手）によって書きとられているが、右の対比からは、一見同文的と見られるものも、古本は、その現存本の文字表記のあり様と一体的に女言葉風に和らげられており、それに対して宇治は、今昔とも近い男言葉風であることが、ある程度うかがわれるだろう。このこととかかわって、なお別の視点から検討してみよう。

尼君の段冒頭部は、古本的な原文をもとにして、宇治・絵巻それぞれが省略風にみえることはよく知られている。つぎに、古本の文を挙げ、宇治に同様にある部分を右傍線で、絵巻に同様にある部分を左傍線で示してみる。用語に異なりのある場合はそれぞれの側に小書し、ない語は（　）に、付加は〈　〉に入れた。

○かかるほどに、ひじりのあねぞ一人ありける。このひじりずかいせむと（しなのには）

てのぼりけるまゝに、かくてとしごりみえねば、①「あはれ、このこゐむとうだいじにてずかいせむとてのぼ」りしまゝにみえぬ、②かうまでとしごろみえぬ、③いかなるならむとおぼつかなきにたづねてこん」とてのぼりて、やましなでら（東大寺　山階寺）とうだいじのわたりをたづねけれど「いさしらず」とけり。のみいふなる。ひとごとに「まうれんこゐんといふ人やある」（　）とへど、（　）尋ぬれど、「しらず」とのみいひて〈しりたりといふ人なければ、たづねに〉とへど〈挿入句〉「しらず」とのみいへば、〈ひとごと〉

わびて、

文字の上で見る限りは、この部分は、古本のような語り口がいささか反復が多くてくどいため、宇治・絵巻がそれぞれ独自に省略して簡略化した風に見える。しかしながら、これと類似のあり方をする「自賀茂社御幣紙米等給事」の冒頭部とを並べて見ると、それが、古本と宇治との物語のとらえ方の違いによるものではないかといったことが、すこしばかり見えてくる。同様に古本の文を挙げ、宇治にある所のみを右傍線で示した。

○いまはむかし、ひえのやま（比叡山）に僧ありけり。いとたよりなかりけるが、くらまに七日ばかりまいらんとてまいりけり。ゆめなどやみゆるとてまいりけど、①見えざりければ、いま七日とてまいりけれど（ども）なえお見えざりけ②れば、又七日のべてまいりけれどなをみえねば、③七日をのべ〳〵して百日まいりけり。

つまり、さきの例とこれと、いずれも①②③として示した「見えぬ」という不安と期待のまじった「おぼつかなさ」の繰り返しを、古本は三度繰り返し、宇治は二度で止めていると見られることである。三度の繰り返しにかかわっては「清水寺御帳給女事」には、

○みたびかへしたてまつるに、みたびながらかへしたびて、はてのたびは、

……

という詞も見られ、「三度」ということに特別のこだわりのあったことが明らかである。古本説話集には、おそらくそのような口承の物語での繰り返しの約束事をよく守って語り出したものが伝えられていると見られる。しかし、書き記され目で読まれる物語となると、三度さながらの繰り返しが口説いことも、右の古本の例で明らかでもある。「信濃国聖事」も、書き記された古本・宇治の祖本のあり方が、どちらにより近いものだったかは簡単には決められないだろう。延喜加持

の段のような内にかかわることなど、古本が原本の文字語りをより口語り風に丁寧に語り加えた可能性もあると見られる。

古本説話集は、その女手風の文字表記や声そのままのかな遣いと一体的に、より宮廷の女語り的に語り直された語り口をもち、宇治拾遺に伝わるものは現伝の漢字交り文の表記と一体的に、男の文字語り的性格が濃いと見られる。そして、文字語りされていた宇治大納言物語には、女房の口で語り直された古本に伝わるようなものがあって（全部というわけでなく）、古本にやや近い絵巻詞書もその系統で、尼君の段冒頭部に絵巻にだけある草子地風の、

○さすがに廿よ年になりければそのかみのことをしりたる人はなくて、

という一文や、「しなのには（姉ぞ一人ありける）」なども、そうした女房語りの中で発生した可能性があるのではないだろうか。

おそらく、平安期女房たちにおける物語の書写は、一人の孤独な臨書的作業ではなく、幾人か相寄って読み手・書き手に分かれ、内容や言葉遣いを何かと吟味・取沙汰しながら行うものだったと思われる。それは、口語りの名残りを承けて、一字一句厳密にということよりも、よりその場にふさわしく好ましい語り口で、会話部分などいわゆる自由区域にはそれなりの感情移入もして、語り記すこともよしとされたのだろう。その雰囲気は、大和物語一四七段、津の国生田川に身を投げた女の昔物語の中で、

○かゝることどもの昔ありけるを、絵にみなかきて故后の宮に奉りたりければ、これが上をみな人々に代りてよみける。伊勢の宮すん所男のこゝろにて［歌］女になりて女［のみこ］［歌］……

などとして、物語の中に、それを読んでいる今の場の人々の歌が十首も挿入されるあり様などからも類推できるであろう。

四

さて、本論にかえって、延喜加持の段を挿入したと思われる人物のことを考えたい。語りの展開は、まず御悩祈祷依頼のため蔵人を遣わす経緯（起）、勅使の蔵人と山の聖との対話（承）、聖のつかう剣の護法の効験（転）、褒美の沙汰（結）と、これもまた、起承転結で構成されていて、大層よくまとまった語りとなっている。

クライマックスの護法童子の活躍の様は、三章で見た「極楽寺僧施仁王経験事」の中で、「びんづら結ひたる童子のずはえ持たる」経の護法が、「病ませ奉る悪鬼どもを追払」と語られていたり、大鏡の中に、

○（花山院）御験いみじうつかせたまひて……御心のうちに念じおはしましければ、護法つきたる法師おはします御屏風のつらに引つけられてふつと動きもせず、……　（中巻　伊尹）

などと語られたりするが、つまりは「飛鉢」と共に、昔のいみじき聖の験力の象徴となるものだった。その験力の聞こえで、命蓮が延喜加持に召されたことは、

○〈延長八年八月〉十九日庚戌。依修験聞、召河内国志貴山寺住沙弥命蓮。令候左兵衛陣。為加持候御前。（扶桑略記第廿四　裏書）

○天皇獲麟之時、召信貴山命蓮聖人〈故実〉（山槐記　長寛三年六月廿八日）

などからして、公家の間では一定知られていたことと思われる。しかも実際は命蓮は参内していたようでもあるが、延喜加持の段の語り手は、参内は護法童子をつかわしたのだとして、相応和尚・清徳聖・増賀上人・寂照上人といった系列の、延喜・天暦以前のよき精神を体現した昔のいみじき聖のイメージで語ったのである。

物語中の命蓮は、飛倉の段でも、長者からの米俵提供の申し出を一切断わり、延喜加持の段でも、褒美に「庄などや寄すべき」という仰せにも、

○「かゝる所に庄などよりぬれば、別当なにくれなどいできて中〳〵むつかしく罪得がましく候。たゞかくて候はん」とてやみにけり。

と固辞し、全くの無欲の人として語られている。しかし、一代で信貴山の堂宇を整えた聖として、現実は必ずしもそういうわけではなかったことは、多くの施入を受け房舎を設けてなお、

○但件山寺雖有十方施主施入田地、其数乏少。（資財宝物帳）

などと記していることからも窺える。ともかく、右の「庄」辞退の弁は、命蓮の言葉として伝承されていたものではなかっただろう。それは、かって考察したように、宇治拾遺中の隆国以前の物語の中にとくに類型化された語られ方をする諸寺の別当、

○別当はしけれどもことに寺の物もつかはで……まして寺の物を心のまゝにつかひたる諸寺の別当の、ぢごくのむかへこそ思ひやらるれ。（薬師寺別当事55）

○寺の物をくふにこそあるらめ。（大安寺別当〜事112）

その他「因幡国別当〜事45」「上出雲寺別当〜事168」などの語られ方に、そのまま通じる評言である。[8] つまりこの段は、「極楽寺僧施仁王経験事」や大鏡のように、実際にその場に居合せた人や直接伝聞した人の語り伝えないし記録に発したものでなく、帝の御悩時などの宮中の対応を憚りなく語ることができ、昔の高徳の聖や護法童子といったものにそれなりの認識ももった男の語り手によって、つくり物語されたと見られるものである。延喜のみかど（醍醐）の曽孫にあたる大納言源隆国という人は、その語り手としてまことによくあてはまる人物と言えるのではないだろうか。

ところで、二章で示した「ゾ・ナド・サテ・ケリ」等をよく用いて、延喜加持の段とは語り口の若干異なる部分は、そのことにどうかかわ

るのだろうか。

そこでまず、「ぞ」によるつよめの語り口が顕著だと見られる宇治拾遺中の物語を、宇治拾遺物語総索引（清文堂）により、岩波古典大系本（無刊記古活字本なので御所本などの古写本とは一字の助辞などに若干異なることがある）の一頁に「ぞ」が三度以上使われることがあり、他にも「ぞ」をもつ物語を抜き出し、題目で示すと次のとおりである。下の数字は物語中の「ぞ」の総数。上の○印は今昔重出、●印は古本に重出のもの。※印は、今昔・古本には重出しないが、さまざまな特徴から注（2）の前稿で大納言物語の可能性が高いとしたものである。

※47長門前司女葬送時帰本処事　9
◉96長谷寺参籠男預利生事　5
●101信濃国聖事　6
○108越前敦賀女観音助給事　13
○132則光盗人ヲ切事　7
○177経頼蛇ニ逢事　4
○180珠ノ価無量事　13
○185高階俊平ガ弟入道算術事　8
○187頼時ガ胡人見タル事　4

つぎに「など」によるぼかしの語り口が顕著なものを同じ基準で挙げる。下の数字の上段は「など」の総数、中段は「ぞ」の総数、下段は接続詞「さて」の数。上の△印は、隆国以後の人物の話。

※19清徳聖奇特事　6　2　1
○30唐卒都婆ニ血付事　6　5　0
※33大太郎盗人事　7　0　1
※47長門前司女葬送時帰本処事　9　9　4　☆
※48雀報恩事　15　2　7　☆
50平貞文本院侍従等事　7　0　0
○59三川入道遁世之間事　4　1　0
77実子ニ非ザル人〜ノ事　5　1　2
△78御室戸僧正事一乗寺僧正事　6　1　4
○94播磨守為家侍佐多事　8　0　1
◉96長谷寺参籠男預利生事　26　5　0
●101信濃国聖事　10　6　10　☆
○102敏行朝臣事　5　1　7
○103猟師仏ヲ射事　4　1　1
○108越前敦賀女観音助給事　20　13　1　☆
※123海賊発心出家事　5　1　3
○132則光盗人ヲ切事　6　7　1
※133空入水シタル僧事　6　1　2
○180珠ノ価無量事　6　13　3　☆
○185高階俊平ガ弟入道算術事　8　8　0

「ぞ」に挙げたものは、177・187以外「など」の方にも挙がり、この「ぞ」と「など」によるつよめたりぼかしたりという、あたかもカメラレンズを遠近に操作するような語り口は、右に示した数値の多いものに共通の特徴と言うことができる。とりわけ「信濃国聖事」は、数値で見る限りその特徴が著しいが、「さて」も含め、とくに注目される数値のものの下に☆印をつけてみると、それらは、さいごの180以外、宇治拾遺中では数少い女が主人公の物語であることがわかる。

「ぞ」や「など」は、ごくふつうの助辞で、とくに女言葉というわけではないが、それらを効果的に頻用するのは、やはり昔物語する老女などに著しい説得力をもつ語り口で、「信濃国聖事（尼君の段）」を筆頭に一群の女の物語は、よりそうした女の物語らしく、いわば老女風語り口が生かされているのだと思われる。ならば、女とは関係のない「玉ノ価無量事」は、なぜそれらと似た語り口もつのだろうか。

この物語は、

○是も今はむかし、筑紫に大夫さだしげと申物ありけり。この比ある箱崎の大夫のりしげが祖父なり。そのさだしげ、京上しけるに、故宇治殿にまいらせ、又わたくしの知たる人〳〵にも心ざさんとて、……

と始まっていて、「故宇治殿」という特別な言い方を残していて、宇治殿頼通が亡くなって間もない頃、その周辺で成立した可能性をもつものである。[9] 物語の構成で注目されることは、「このごろある」人の祖父世代、「大夫さだしげ」の体験談に発する前半と、

○玉のあたいはかぎりなき物といふ事は、今はじめたる事にはあらず。筑紫にたうしせうずといふ物あり。それが語りけるは、

と、はっきり語り手を示す後半とが接合されていることである。（なお、今昔には前半だけが重出し、むろん宇治殿に「故」はついていない。）しかも、前後が単なる並列接合で終るのでなく、結びの部分は、

○せうずが玉をばから綾五千段にぞかへたりける。……それを思へば、さだしげが七十貫が質を返したりけんも、おどろくべくもなき事にてありけりと、人のかたりしなり。

と、「せうず」「さだしげ」の両体験を比べて語る「人」を出し、両話をまとめて終っている。これは、一見、「信濃国聖事」の「飛倉」と「複衲」の利益をさいごに合わせて語るあり方と同工と言えなくもない。源隆国は、宇治殿とは大変親交のあった人である。冒頭の「私の知人」も結びの「人」も、隆国本人のことだった可能性がないとはいえない。そして、隆国は、おそらく昔物語する老女の聞書きをする中で、その語り口の影響を受けながら、おのずと聞き書き風物語における自らの語り口を成立させていたのではないだろうか。

ところで、右に題目を挙げたものは、ほとんどすべて文末にケリを用いて語っているが、中に一つだけ、ケリによらない語りのものがある。宇治拾遺中著名な「空入水シタル僧事」である。これは、冒頭部

に「見れば」という主体不明の言い方が出て、その言葉どおりに見たままを実にリアルに語る絶妙の語り口を持つものだが、さいごに一度だけ、

○はだかなる法師の河原くだりに走を、つどひたる者どもうけとり〳〵打ければ、頭うちわられにけり。

と、ケリがつき、結びの後日譚にもう一度ケリが出る以外は、途中全くケリのない語り口で展開している。右に挙げた題目の物語の中では短い方の語りだが、明瞭な起承転結構成をもち、承および転の場を「さて」で転換し、結の冒頭だけ「とかくいふほどに」とかえている。また、

○遠くよりきたるものは帰などして、河原人ずくなに成ぬ。

といった、動詞連用形につく独特の「など」（現代語では、「など」そのままよりも「帰ったりして」という「たり」に近い語感がある）の用法は、

○道などにて落などすべき事もあらぬに、（47）
○これをあけくれ食てあり。一里くばりなどして、（48）
○物くふ事かたくなりなどして、（108）
○思のままにわたくしの人〳〵にやりなどして（180）

などと、さきの☆印の物語の中に出て来るものと共通してもいる。ところで、「信濃国聖事」の延喜加持の段が、文末にケリをほとんど用いないというのは、昔物語としてはきわめて特異である。しかし、それが「空入水シタル僧事」のあり方と共通するとなれば、語り手は、延喜加持の段を昔物語の聞書として記したというのでなく、主体的に自らの語り口で語り記した証になるとも見られるだろう。

「信濃国聖事」は、すべて最終的には、延喜の御門の曽孫、宇治大納言源隆国の語り出したものである。しかし、老女の昔物語の聞書風に文体を成立させた部分と、自ら主体的に語った部分とでは、微妙に語り口が異なっていて、もしかしたら、それを意識的に交響させてみたのが、「信濃国聖事」だったというのではないだろうか。そのことは、このよき物語を承けて描かれた絵巻[19]の、製作にかかわった人なども、よく理解していたことだったと思われる。

注

（1）古事記における「サホ姫・サホ彦」、万葉集における「大伯皇女・大津皇子」、元興寺伽藍縁起における「推古天皇・用命天皇」など。
（2）木村「宇治大納言物語の語りと精神」（奈良大学紀要第12号）
（3）柳田国男『遠野物語』の遠野も、もともと大同年間に開かれたという霊山早池峯をひかえ、川の落合という交通の要路として陸奥各地の人々の「往来参集」の場であった。「遠野物語」が「大和物語」と異なるのは、そこに集まって来た物語が、千年の土着熟成を経たのちに、文字に達したということだろう。

（4）この件に関しては、「聖徳太子伝暦」に記述が見られる。
（5）亀田孜「信貴山縁起虚実雑考」（仏教芸術27）に、信貴山は「僧尼の同住修行であったか」とされる。
（6）鎌倉期の「阿婆縛抄〈諸寺略記上〉」の記事にも、「其時士女号之飛倉」と、「女」の字を残している。
（7）吉田幸一編著『宇治大納言物語伊達本』（古典聚英3）所収の古写本本文異同対照表によると、わずかな助辞の違いが古本説話に近いのは「御所本」である。
（8）注（2）に同じ。
（9）木村「『かたり』および物語集の生成－宇治大納言物語から宇治拾遺物語へ－」（国語国文第53巻第6号）
（10）木村「『信濃国聖事』の信貴山絵巻への展開」（仏教文学第24号）

The Composition of "Shinanonokunino Fijirinokoto" and Its Narrators

Noriko KIMURA